

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

橋の地蔵様

うつぶせになったその訳は

伝説

橋の地蔵様

うつぶせになったその訳は

紀行

橋の地蔵さんを訪ねる

- ・橋の地蔵さんを訪ねて
- ・あごなし地蔵さんと泣き石
- ・金鐘城
- ・国宝浄土寺とその前身

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト

橋の地蔵様

うつぶせになったその訳は

小野の高田町には、「橋の地蔵様」という小さなお地蔵さまがお祭りされています。一年中、お供えの花が絶えないこのお地蔵様は、たいへん靈驗（れいけん）あらたかだということで、近所の人たちはもちろんですが、遠くからもお参りの人がやってきます。

けれども今立っているお地蔵さまは、目印のために新しく置かれたお地蔵様なのです。本当の橋のお地蔵様は、その後ろ側のみぞの上にうつぶせになり、まるで橋のようになっていますから、そのお顔はみぞに入ってからぞきこまないと見えないのです。

お地蔵様が橋になったのには、こんな訳がありました。

ずっと昔は、このお地蔵様もみぞのそばにまっすぐ立っていらっやいました。そのころ、お地蔵様のそばに、ひとりぼっちで住んでいるおばあさんがありました。

おばあさんは村でも一番の働き者で、毎朝仕事をはじめる前、お地蔵様にお花やお供え物をもってお参りするのでした。ほかにはだれも、お参りする人がありません。家を出て、田んぼのわきを通り、細いみぞをこえて、おばあさんは毎日お地蔵さまにお参りしていました。



「お地蔵様、ひとりきりでおさびしいでしょう。私もひとりなんです。どうぞ仲良くしてください」

おばあさんはそう言って、お地蔵様をきれいにそうじしてはおいのりするのでした。お地蔵さまは、ひとりぼっちのおばあさんの話し相手でもあったのです。



そんなある朝、おばあさんは急にこしが痛くなってしまいました。すぐに良くなるだろうと思っていたのですが、だんだんひどくなって、歩くのも大変です。ご飯を作ることもせいっぱいというありさまでした。毎朝の楽しみだったのに、お地蔵様と話することもできません。

何日か過ぎて、ようやく少しばかり痛みがおさまると、おばあさんは久しぶりにお地蔵様にお参りすることにしました。つえをついて二、三歩歩いては休み、休みしながら、おばあさんはやっとのことでお地蔵様の所へやってきました。

何日か来ない間に、お地蔵様のまわりは草ぼうぼうになっています。

「まあまあ、こんなに草がのびてしまって。さぞやうっとうしかったことでしょう」

おばあさんはこしが痛いのがまんして、お地蔵様のまわりの草をぬきはじめました。何本かぬくたびに、こしをさすって休まないと痛くてたまりません。それでもおばあさんは、少しずつ草をぬいてゆきました。

「毎日お参りできたら、こんなに草がのびることもなかったのに、許してくださいね」

ようやく草をぬきおわって、気がつくと、もうお日様が山の下にかくれそうになっていました。

「おやおや、もう日が暮れる。足元がまっ暗になる前に帰らないと。お地蔵様、また明日来ますからね」

おばあさんはそう言うと、つえを手にして立ち上がりました。ところがこしが痛くて、足が前に出ません。来るときはよいしょとまたいだみぞを、どうしてもこえることができないのです。

「あいたたた。こしが痛くて足が動かんわ。どうしたらよからうか」

おばあさんがつぶやくと、お地蔵様がとつぜん、「おばあさん、私が橋になってあげましょう」と言って、みぞの上にばたんとうつぶせになったのです。

「さあさあ、どうぞわたってください」

おばあさんはおどろきました。

「めっそうもない。お地蔵様の背中をふむなんて、そんなもったいないことをしたら、ばちがあたります」

おばあさんがそう言うと、お地蔵様は、

「私も、長い間立ってばかりいたから、こしが痛くなっていたのです。どうぞわたるついでに、私のこしをふんでください」といいます。そう言われても、おばあさんはなかなか、お地蔵様の橋をわたる決心がつきませんでした。

けれどもお地蔵様は、「早くふんでください」と何度もせかします。とうとうおばあさんも、お地蔵様をふんでわたることにしました。

「ああ、もったいない、もったいない」おばあさんはぞうりをぬぐと、おそろおそろ、できるだけそっとお地蔵様の背中をふんでわたりました。



「ありがとうございました、お地蔵様。さぞや痛かったでしょう。本当にもったいないことをしました」

おばあさんはそう言いながら、お地蔵様のこしのあたりを両手でそとなでました。するとどうでしょう。あんなに痛かったこしが、すうっと楽になったのです。それだけではなく、元気だったころと同じようにこしがしゃんとして、どんどん歩けます。

「ああ、ありがたい」

次の日からおばあさんは、また元気に働いて、お地蔵様にもお参りできるようになりました。

この話は、村中の人たちに伝わりました。それほどご利益（ごりやく）のあるお地蔵様ならば、と、たくさんの人たちがお参りに来るようになりました。やがてそのうわさが伝わると、遠くの村からもお参りの人が訪れるようになりました。

それからもおばあさんは、元気で長生きして、幸せな一生を送りました。そして、おばあさんが亡くなった後にも、お地蔵様にお参りする人が絶えることはありませんでした。

今では、お地蔵様のみぞもコンクリート造りに変わりましたが、お地蔵さまはやっぱり、橋のままでいらっしやいます。

紀行「橋の地蔵さんを訪ねる」

橋の地蔵さんを訪ねて



コンクリートの
水路



新しいお地蔵様

橋の地蔵さんは、小野市北西部の「青野ヶ原」に近い、加古川の左岸の高田町にある。雄岡山・雌岡山（おっこさん・めっこさん）からさらに国道175号線を北上して、小野市へ向かうと、三木市大村の交差点から道幅の広い新道になるが、ここからは旧国道に道をかえることになる。さらに神戸電鉄の小野駅前から、県道を北上すると高田町に到る。

県道が通っていた台地から加古川に向かって坂道を下ると、青々とした田が広がり、その中に高田の集落がある。道の先には加古川の堤防が見え、その対岸が南北にのびた広大な青野ヶ原台地である。

しばし橋の地蔵さんを探して車を走らせたが、いっこうに見つけれない。確かに田んぼのわきにあるはずなのだが、目にとまらないのである。探しあぐねたころ、作業をしている村の人に会ったので「橋の地蔵さんはどこですか」と尋ねたところ、「橋の地蔵さんかいな。あこのな、家が見えとるやろ。あの筋のちょっと入ったとこや」と教えてくれた。教えられたとおりに道をたどると、広い車道からちょっと入った所に、「橋の地蔵」の物語を刻んだ、背の低い石碑が建てられていた。

石碑の左には、最近作られたらしい小さな地蔵が置かれ、右側には古い一石五輪塔（いっせきごりんとう）のかげらが置かれている。そして、ほ場整備でコンクリート造りになってしまった水路の上に、お地蔵さんの橋がかかっていた。

橋の地蔵さんは、板石に刻まれた小さなお地蔵さんである。橋になるときにうつぶせになったということで、今もうつぶせのまま、コンクリート水路にかかっている。もっとも今ではお地蔵さんを踏んで渡る必要はない。お地蔵さんの前には、少ししおれかけた花束が供えられ、その間に置かれたお茶碗にはおさい銭が入れられていた。隣の新しいお地蔵さんのひざにも、おさい銭が置かれている。今でもお参りする人が絶えないということがわかる。

お地蔵様の顔を拝見しようと水路に入ってみたが、狭すぎてお地蔵さんが見える所まで顔をつっこめない。仕方なく、カメラを持った腕をいっぱい伸ばして、「このあたりか」というところでシャッターを切ってみた。

写ったのは、立ち姿のお地蔵さんと、そのわきに座る小さなお地蔵さんであった。が、まっすぐに写っていない。腕を伸ばしたり少し縮めたり、手首を曲げてみたりと、散々苦労して、やっと何枚か「こんなもんかな」という写真が撮れた。撮り終わって立ち上がると、水路の中でかがんで、不自然な姿勢をしていたせいか腰の筋肉が引きつっている。こんな時こそ橋の地蔵さんの御利益にすがらねばと、伝説の通りお地蔵さんの背中を両手でなでてみたのは言うまでもない。

青々と稲が育つ田の上を、ツバメが急旋回しながら飛び交っている。少し歩いてみたら、池の堤にカワラナデシコがピンクの花を咲かせていた。のどかな風景。コンクリートの水路はちょっと味気ないけれど、お地蔵さんを大切にしてきた村の人たちの気持ちは、伝説とともに、今も間違いなく受け継がれている。

橋の地蔵さんの周辺には、ほかにも伝説スポットがいくつかあるし、歴史を伝える文化財も多い。小野市では市内の地区ごとに、こうした場所をとりまとめてわかりやすく編集したパンフレットを作っているから、これを見ながら歩くのも楽しいだろう。



橋の地蔵さん



橋の地蔵（石碑）



水路にかかる
お地蔵様



水路の底から

あごなし地蔵さんと泣き石



街道の脇に立つ

橋の地蔵さんの北方、小野市と加東市（かとうし）との市境近くには、「あごなし地蔵さん」がある。橋の地蔵さんから西へ向かって加古川（かこがわ）を越え、県道349号市場滝野線を北へ3kmほど車を走らせる。復井町の交差点の一つ北で右折して、JRの線路を渡り、さらに村の中の細い道を左折して200mばかり進んだやぶの前である。元はどこにあったものかわからないそうであるが、「世の中に出て人々を助けたい」とおっしゃったことから、現在ある場所に移されたという。道路から一段下がったところに小さな祠（ほこら）があって、橋の地蔵さんと同じように花束や果物やおさい銭が供えられていた。



祠と石碑

お地蔵様の顔を見ようと、地面に顔を近づけて祠をのぞいてみたが、小さなお地蔵様は赤い前掛けをいくつもされていて、本当にあごが無いのかどうかわからなかった。



あごなし地蔵（石碑）



あごなし地蔵様

あごなし地蔵さんの南約2.5km、河合西町の丘の上には「泣き石」がある。自然石の表面に梵字（ぼんじ）と絵が刻まれた碑なのだが、表面の風化が進んで刻線は今ひとつはっきりしない。昔、この石を別の場所に運んだところ、「元の場所に帰りた」と泣いたので、あわてて返したという話が伝えられている。



泣き石からの展望



泣き石（石碑）

お地蔵様といい泣き石といい、石には不思議な魂があって、人を助けたり脅かしたりするものだと、昔の人は心から信じていたのだろう。



泣き石



刻まれた梵字

金鐘城



城跡全景

さらに南へ車を走らせると、昭和町の夢の森公園に、金鐘城（かなつるべじょう）がある。青野ヶ原台地の先端に位置する、中世に築かれた山城であるが、同じ範囲の中で弥生時代の高地性集落跡も見つかっており、現在は史跡公園として整備されている。



金鐘城（看板）



尾根の先の櫓

土塁や柵（さく）、堀跡、郭の中の建物跡などがわかりやすく復元されている。また台地の先端には物見櫓（ものみやぐら）が復元されていて、中世地方城館のありかたがよくわかる城跡である。

ここからの眺望はすばらしく、小野市南部から播磨（はりま）・丹波（たんば）国境の山塊まで見渡すことができる。



復元された櫓

国宝浄土寺とその前身

橋の地蔵さんから東へ5kmほどの浄谷町には、国宝「阿弥陀三尊立像」を本尊とする浄土寺がある。浄土寺は真言宗の寺院で、鎌倉時代初めごろに、重源（ちょうげん）により創建されたものである。もともこの付近は、東大寺領の「大部荘（おおべのしょう）」という荘園であった。重源は、平安時代末に焼失した東大寺大仏殿を再興するために、西日本各地に7か所の別所を設けたとされるが、そのうちの 하나가浄土寺だとのことである。浄土寺の門を入ると、境内の中央には蓮の花が咲く池がある。池をはさんで東側のお堂が薬師堂、西側が浄土堂であるが、もちろんこの配置は西方浄土に坐す阿弥陀如来と、東方浄瑠璃世界（じょうりせかい）の薬師如来の位置をあらわしているのだろう。



浄土堂



浄土堂



薬師堂



浄谷八幡神社拝殿



広渡廃寺（全景）



復元模型



復元画



展示室

大仏様（だいぶつよう）建築の浄土堂は、浄土寺創建当時の建築で、本尊の快慶作の阿弥陀三尊像は特に著名である。阿弥陀様が祭られているお堂の西には幅広い格子窓があって、夏の夕暮れには赤い夕日が射し込むようになっている。夕日が射すと、朱に塗られた本堂の中は赤い光で満ちて、金色の阿弥陀様を包み込み、真の極楽浄土にいるかのような荘厳な雰囲気醸し出すそうである。

この浄土寺の前身とされるのが広渡廃寺（こうどはいじ）である。国指定史跡の広渡廃寺は、浄土寺と橋の地蔵さんの中ほどにあって、現在は史跡公園として整備され、資料館も併設されている。

奈良の薬師寺に似た伽藍配置（がらんはいち）をもつ広渡廃寺は、7世紀に造営された後、平安時代まで続くが、平安時代の末には衰微して荒れ果てていた。その仏像の一部が、浄土寺に移されたということである。

公園では、各建物跡がわかりやすく整備されていて、礎石の配置や回廊の姿がよくわかる。また資料館には、ここからの出土品が多数展示されているから、ぜひ一度訪ねてみてほしい。

加古川の中流域は、古くから開けた場所である。いつのころからか村ごとに祭られたお地蔵様は、どれほど世の中が有為転変を経ても、いつも暮らしのそばにいて人々をなぐさめたり、力づけたりしてくれてきた。これからもきっとそうであるに違いない。

用語解説

小野市（おのし）

兵庫県中央部に所在する市。加古川中流域に位置し、1954年に市制を施行する。2007年11月現在の人口は約50,500人。江戸時代に一柳氏（ひとつやなぎし）が、小野に陣屋を移し、その城下町が建設された（小野藩）。古くから、そろばんと家庭用刃物に代表される伝統工業に特徴があり、複合地場産業都市として発展を遂げてきた。

青野ヶ原（あおのがはら）

播州平野の中央部に広がる台地。東は加古川に面する。小野市、加東市、加西市にまたがり、東西3km、南北10km、標高は80～90mを測る。

台地上からは後期旧石器が出土するほか、古墳も分布しているが、酸性土壌である上、水利に恵まれなかったため開発が進まなかった。明治24（1891）年に陸軍演習地となり、太平洋戦争終結後はアメリカ軍に接收されたが、昭和32（1957）年からは自衛隊演習場となった。近年、台地周辺には播磨中央公園、工業団地などが造営され、変貌しつつある。

加古川（かこがわ）

兵庫県の南部を流れる一級河川。延長96km、流域面積1,730平方キロメートルを測る県下最大・最長の河川である。但馬・丹波・播磨の三国が接する丹波市青垣町の粟鹿山（あわがさん、標高962m）付近が源流で、途中小野市、加古川市などを流れ、加古川市と高砂市の境で播磨灘に注ぐ。

加古川の水運は、古代から物流を担う経路であったと考えられ、特に日本海に注ぐ由良川水系へは峠を越えずに到達できることから、「加古川 - 由良川の道」とも呼ばれて、日本海側と瀬戸内側を結ぶ重要なルートとされている。

雌岡山・雄岡山（めっこさん・おっこさん）

神戸市西区に所在する山。雌岡山は標高249m、雄岡山は標高241mを測る。古代から神奈備（かなび：神が鎮座する山）として信仰されたようで、雌岡山頂上には、神出神社が祭られている。優美な山容から、一帯は『改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003』の自然景観でCランクにあげられている。

五輪塔（ごりんとう）

墓、または故人を供養するために建てられた塔の一種。多くは石製。下から順に、基礎、塔身、笠、請花（うけばな）、宝珠の5段に積み、それぞれが、地、水、火、風、空をあらわす。密教に由来し、平安時代中ごろから造られるようになった。一石五輪塔は、これを一個の石材に刻んだもの。

金鐘城（かなつるべじょう）

小野市昭和町に所在する中世の城跡。青野ヶ原台地の先端に位置する山城で、平成4年から6年にわたる調査で、全容が明らかにされた。城の構造としては、主郭と西の郭からなり、その間に幅約20m、深さ約9mの堀切が設けられている。主郭は土塁に囲まれ、その内側に4棟の建物跡が検出された。城主は、赤松氏の家臣中村氏とされ、後には別所氏が保有した。発掘調査では、壺（つぼ）、播鉢（すりばち）、茶碗などの陶磁器、石臼、土錘などの漁労具、刀、小刀の鞘などの武具類、瓦、釘、硯、水滴、銅銭などが出土した。

このほかに山城の範囲内で、弥生時代の竪穴式住居が6棟検出され、加古川を見下ろす高地性集落が存在したことが確認されている。

用語解説

浄土寺（じょうどじ）

小野市浄谷（きよたに）町に所在する真言宗の寺院。極楽山（ごくらくさん）と号する。東大寺の播磨別所として、重源（ちょうげん）が建久年間（1190～98）に開いた。

この地域には、古くから東大寺の荘園（大部荘：おおべのしょう）が営まれていたが、重源は、東大寺大仏復興のために、長く荒廃していた同荘園を東大寺別所として経営することとなった。

境内は、中央の池（放生池）を中心に、西に浄土堂、東に薬師堂を配する。

西の浄土堂は、重源が1194年に建立したもので、当時の中国（宋）の建築様式を取り入れた大仏様（だいぶつよう）と呼ばれる様式で建てられており、鎌倉時代以降の寺院建築に大きな影響を与えた。大仏様の建築は、ほかに東大寺南大門、同開山堂などが残されているのみで、本尊の阿弥陀三尊像とともに国宝に指定されている。

浄土堂は夏の間、阿弥陀三尊の背後から夕日が射しこむように設計されており、夕暮れ時に朱色に染まる堂内は荘厳そのものである。

ほかに1517年に再建された薬師堂、重源坐像、境内の八幡神社本殿・拝殿、絹本著色仏涅槃図（けんぼんちゃくしよくぶつねはんず）ほかの重要文化財、県指定文化財など多数を保有し、播磨を代表する古刹といえる。

真言宗（しんごんしゅう）

仏教の一派。インドに起こり、平安時代前期に、空海によって日本へもたらされた。空海は、高野山に金剛峯寺を開いて、真言宗の道場としたほか、823年には京都に教王護国寺（きょうおうごくじ：現在の東寺）を受け、これらの寺院が同宗の中心となった。

重源（ちょうげん）

鎌倉時代初期の、浄土宗の僧。醍醐寺（だいごじ）で真言を学んだ後、法然について浄土宗を学んだ。3度にわたって宋へ入り学んだほか、土木建築の技術を習得した。戦乱で荒廃した東大寺再建のために、造東大寺大勧進職（ぞうとうだいじだいかんじんしき）に任ぜられ、諸国をまわって勧進（かんじん：寄付を募ること）に努めるとともに、民衆の教化・救済などの社会事業を推進した。

東大寺（とうだいじ）

奈良市に所在する華厳宗（けごんしゅう）の寺院。聖武天皇の発願により745年に建立されたもので、本尊は盧舎那仏（るしゃなぶつ）。平安時代にかけて、23か国に92か所の荘園を領有して勢力を誇ったが、1180年に平重衡（たいらのしげひら）の焼き討ちにあって、堂塔の大部分を焼失した。その後、重源（ちょうげん）が中心となって復興されるも、1567年には三好氏一族と松永久秀の戦火により再び焼失。大仏殿は1692年に至ってようやく復興された。

創建以来の建築として、三月堂、正倉院（いずれも国宝）が、鎌倉時代の建築として南大門、鐘楼（いずれも国宝）などが残るほか、奈良～平安時代の仏像、古文書など、日本史上重要な資料が多数残され、その多くが国宝、重要文化財に指定されている。

用語解説

大部荘（おおべのしょう）

播磨国に設けられた東大寺の荘園。現在の小野市付近にあたる。12世紀中ごろに成立したが、その後国衙（こくが：律令制下において国単位で設けられた政庁）との間で所属が争われたため、放置されて荒廃した。12世紀末になって、東大寺の復興に従事することになった重源の尽力により、東大寺領として確定した。

西方浄土（さいほうじょうど）

仏教において、この世の西方、十万億の仏土を隔てたところに存在する、阿弥陀仏の浄土。極楽浄土。

阿弥陀如来（あみだによらい）

阿弥陀仏と同じ。大乘仏教の浄土教の中心をなす仏。修行者であったとき衆生（しゅじょう）救済の願を立て、成仏して後は西方の極楽浄土で教化しているとされる。自力で成仏できない人も、念仏を唱えれば阿弥陀仏の力で救われ、極楽に往生すると説く。平安時代に信仰が高まり、浄土宗・浄土真宗の本尊となっている。

東方浄瑠璃世界（とうほうじょうりせかい）

阿弥陀如来（あみだによらい）の浄土が西方にあるのに対し、東方に存在するという薬師如来（やくしによらい）の浄土。地は瑠璃（るり）からなり、建物・用具などがすべて七宝造りで、無数の菩薩（ぼさつ）が住んでいるという。

薬師如来（やくしによらい）

東方浄瑠璃世界（とうほうじょうりせかい）の仏。修行者の時に12の願を立てて成仏したとされ、衆生（しゅじょう）の病気を治し、安楽を得させる仏とされている。仏教の伝来以後、治病の仏として広く信仰された。薬壺（つぼ）を持つ像が多い。

大仏様（だいぶつよう）

天竺様（てんじくよう）ともいう。鎌倉時代に、東大寺大仏殿再建に採用された、中国（宋）の建築様式。構造上、大型木造建築に適する様式である。

快慶（かいけい）

鎌倉時代の仏師。生没年不詳。運慶の弟子とされ、流麗な作風で知られている。東大寺を再興した重源（ちょうげん）の知遇を得て、浄土寺阿弥陀三尊像、東大寺の阿弥陀如来像、同南大門金剛力士像、同僧形八幡神像などのほか、多数の阿弥陀如来像を残している。

用語解説

広渡廃寺（こうどはいじ）

小野市広渡町に所在する古代寺院跡。昭和48～50（1973～75）年と、平成5～7（1993～95）年に発掘調査が実施され、伽藍配置と規模が明らかになった。伽藍配置は、金堂と中門の間に東西両塔を配し、金堂の背後に講堂をおき、これらを回廊で取り囲むという薬師寺式を踏襲しており、寺域は、東西約100m、南北約150mにわたる。

出土遺物等から、創建年代は奈良時代中ごろ、廃絶年代は平安時代後期と考えられている。なお、小野市の浄土寺に伝わる『浄土寺縁起』では、荒廃したままとなっていた広渡寺の本尊を、浄土寺薬師堂の本尊として移して安置したと記されている。

伽藍・伽藍配置（がらん・がらんはいち）

伽藍とは寺院の建物のこと。伽藍配置とは、寺院における堂塔の配置で、時代や宗派により、一定の様式がある。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
	小野ふるさと伝え語り	1998	小野の歴史を知る会	小野市文化連盟
	今はむかし伝説紀行	2004	ビジュアルブックス編集委員会	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化	兵庫県むかしむかし第一集	1974	兵庫県老人会連合会	兵庫県老人会連合会
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	風土記の考古学2	1994	檀本誠一編	同成社
	小野市史第一巻 本編	2001	小野市史編纂専門委員会	小野市
	おのふるさとマップ1 かわいを歩く…	2005	小野市教育委員会	小野市教育委員会
	おのふるさとマップ3 おおべを歩く…	2005	小野市教育委員会	小野市教育委員会
その他	国宝浄土寺(見学者用パンフレット)	不詳	小野市観光協会	小野市観光協会
	夢の森公園 金鐘城遺跡広場(見学者用パンフレット)	不詳	小野市教育委員会	小野市教育委員会

所在地リスト



橋の地蔵	小野市高田町
広渡廃寺	小野市広渡町竹ノ本ほか
金鐘城	小野市昭和町441-6ほか
泣き石	小野市河合西町
あごなし地蔵	小野市復井町1656
浄土寺	小野市浄谷町2094

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日